

サリー州ムアパーク

——サー・ウィリアム・テンプルの屋敷とその歴史——

橋 沼 克 美

サー・ウィリアム・テンプル (1628-1699 年) は、チャールズ二世治下の外交官あるいはジョナサン・スウィフトのパトロンとしてばかりでなく、エッセイストおよび園芸家としてもその名を知られている。『エピクロススの庭』(*Upon the Gardens of Epicurus*) (1685 年) は彼のエッセーの中でも最もよく知られているが、その中でテンプルが絶賛した庭園がハートフォードシャーのムアパークである。テンプルはドロシー・オズボーンと、7 年越しの恋愛そして双方の家の間での婚姻争議を経て、1655 年のクリスマスにやっと結婚することができた。彼らはハネムーンに互いの友人リチャード・フランクリンの所領ハートフォードシャーのムアパークに滞在した。この時の甘美な記憶はテンプルの心に強く印象づけられたものとみえて、彼はそれから 30 年後の『エピクロススの庭』の中でこの庭園の完璧なレイアウトを克明に記している。ハートフォードシャーのムアパークは、才媛の誉れ高いベドフォード公爵夫人ルーシー・ハリントンが設計したもので、後にフランクリンの手に渡った⁽¹⁾。

テンプルがハートフォードシャーのムアパークを理想の庭園と見なしたのは、その完璧な幾何学的レイアウトと、英国の気候に適した植物の選択のためであった。この庭園の外観を述べただけは近代英国庭園史上の重要な記録である。テンプルは次のように述べている。

それは (館が立っている) あまり急でない丘の麓にある。館の長さは……庭園の幅と同じで、大広間は、確か長さ 300 歩ほどで幅の広い土壇の砂利道の中央に面している。砂利道の縁取りには普通の月桂樹が距離をおいて植え込んであるが、花と果実をつけないときのオレンジの木のような美しさがある。この遊歩道の中央と両端には下の非常に大きな花壇に降りる石段がある。花壇は砂利道によって

四分割され、二つの池と八つの彫像が配置されている。土壇の砂利道の端には二つの東屋がある。花壇の両側には石穹で支えられ庭に面した二つの大きな回廊がある。下には石が敷いてあり、花壇の中で唯一の日陰の散歩道となっている。その端にはさらに二つ東屋がある。この二つの回廊の上のほうには、鉛葺きでバラスターのフェンスを付けた土壇がそれぞれにある。そしてこれらの空中の歩道は最初の土壇の端の二つの東屋からつながっている。南に面した回廊は蔦に覆われ、オレンジ栽培に向いていた。もうひとつの回廊はギンバイカなどのありふれた緑葉冠に向いていた。こうした園芸法が当時も今ほどに流行していたならば、きっとそのような用途に使われたことだろう。

花壇の中央からは、二本の長い階段が人工洞窟をはさんで一段低い庭に降りている。そこは果樹園で、伸び放題に伸びた草が日陰をなしている。小道は緑一色で、人工洞窟には貝殻と岩を使った模様、泉、噴水が色を添えている。もし丘がこの低い庭で途切れていなかったならば、また、塀が敷地を横切る公道に接していなかったならば、緑葉冠だけの部分がもうひとつ加えられたことであろう。しかし、この点を補完すべく館の反対側にも庭がある。そこは野趣に富み、緑陰も濃く、粗削りな岩と泉があしらわれている⁽²⁾。

『エピクロス庭』が書かれた前後の英国における庭園趣味は、チャールズ二世治下のフランス様式にせよウィリアム三世治下のオランダ様式にせよ、幾何学的対称性を特徴とする整形式庭園が主流であった。しかしながら、このような様式美とは異なる美的価値観をテンプルは知っていた。それは、人工的要素を極力排除した（かのように見える）中国式庭園である。テンプルは、そのような庭園の幾許かを実際に見たことがあるが、中国で暮らしたことのある人々から、より多くのことを聞いて知ったという。テンプルによれば、幾何学的均衡美によらない、いわば無為自然の美の概念は、“Sharawadgi”ということばで中国人がよい表していたものらしいが、このことばの意味・出所については未だに不明である⁽³⁾。しかし、テンプルのいわんとする美の概念は明確である。十八世紀になって本格的に英国で流行するようになる「風景庭園」(landscape garden)あるいは「英国式庭園」は、自然な地理的景観を活かす点に特徴があるが、そのような庭園趣味の少なくとも萌芽的可能性を最初に明確に表現したのがテンプルだったといっても過言ではない⁽⁴⁾。

1681年に公務の世界から引退したテンプルはサリー州のシーン (Sheen) (現在のリッチモンド) 西部にある屋敷で過ごした。この地所は、テンプルが1665年に買い求

め、その後、親しい隣人であるライル卿（フィリップ・シドニー）から土地を買い足して地所を広げたり、大陸産のサクランボやブドウを移植したりして、かねてから念願であった悠々自適の田園生活を営むにふさわしい舞台として整えていたものである⁽⁵⁾。1685年、テンプルの長男ジョンは結婚したが、以後の2年間シーンの屋敷には父と息子の二世帯が同居した。しかし、シーンはロンドンから近いこともあり人の出入りが絶えず、また、老夫婦は閑静な住まいが若夫婦が連れてくる賑やかな仲間たちに乱されるのを好まなかったため、数年前に買い求めていた同じサリー州のファーナム（Farnham）近くの地所に移り住んだ。この地所はムアパーク（Moor Park または Morepark）と呼ばれるが、テンプルがハネムーンの思い出の地、ハートフォードシャーのムアパークに因んで名づけたとされる⁽⁶⁾。以下では単にムアパークという場合、テンプル自身のサリー州の地所を指すことにする。

ムアパークは既に十六世紀初頭には荘園として記録されていた。テンプルは前の所有者フランシス・クラーク（Francis Clarke）から、それまでコンプトン・ホール（Compton Hall）あるいはムアハウス（Morehouse）と呼ばれていた地所を買い求め、ムアパークと名づけた。ところで、テンプルの地所は、十三世紀末には“*la Morehouse inter Waverley et Farnham*”と記録に記されている。また、十七世紀初頭のジョン・スピード（John Speed）の地図には“Morehouse”の名で載っている⁽⁷⁾。ということは、地所の名前の「ムア」の部分は古くから受け継がれてきた名称であり、「ハウス」を「パーク」に変えたのがテンプルだったと考えることができる。

園芸家としてのテンプルについての同時代人による数少ない貴重な証言は、ジョン・イヴリンによって残されている。イヴリンは、1678年にシーンのテンプルの隣人ヘンリー・ブロンカー（Henry Brouncker）の屋敷に行った折、見事な果樹のあるテンプルの庭園を目にしたことを日記に記している⁽⁸⁾。その10年後、イヴリンは近くに立ち寄ったついでに、シーンのテンプルの屋敷と庭を訪ね、「最も目についたのはオレンジ栽培の温室と庭園で、垣根にした果樹の植え方と使い方の見事さといったら、今まで見たうちのどれよりもはるかによい」と、日記の中で絶賛している⁽⁹⁾。王立協会の主要メンバーであり、大陸の文化に通じ、他の多くの分野同様園芸にも一家言を持っていたイヴリンの観察だけに、信頼するに足るものであろう。惜しむらくは、同じサリー州に住み、年齢もさほど違わないイヴリンとテンプルとの間に親交がなかったことである。もしこの多才なふたりが親しかったならば、こと庭園術に留まらず、十七世紀英国の政治と学芸について多くの興味深い見解を後世に残してくれたことであろう。

シーンから西に約 50 キロ、ハンプシャーとの州境にファーナムという町がある。この辺りはノース・ダウンズ (North Downs) と呼ばれる草地の丘陵がなだらかに続き、テムズ河の支流ウェイ (Wey) 川が流れている。ファーナムは古い町で、十二世紀初頭に作られたノルマン様式の城跡が中心部にある。そこから東へ 1 キロほどの所には、城と同じ頃建てられた、英国で最古のシトー派修道院ウェイヴァリー・アビーの廃墟がある。ウォルター・スコットの連作小説ウェイヴァリー・ノヴェルズはこの修道院から名をとったといわれる。ウェイ川を挟んでウェイヴァリー修道院の北側にムアパークは位置する。テンプルは 1680 年にこの土地を 2 千ポンドで購入した。実際にムアパークに移り住んだのは 1686 年だが、以後死ぬまでの 13 年間のほとんどをここで過ごした。晩年のテンプルは著述と庭園作りに励み、教養あるカントリー・ジェントルマン然とした生き方をしたのである。

ムアパークにおけるテンプルの庭園がどのようなものであったかを知ることのできる 1 枚の絵が残っている⁽¹⁰⁾。これはおそらく、英国の主だった庭園を紹介した『英国図解』(*Britannia Illustrata* [1707]) の著者レナード・ニフ (Leonard Knyff) とヤン・キップ (Jan [or Johann] Kip) のいずれかの手によるもので、1690 年頃のムアパークの鳥瞰図である。この絵を見ると、ムアパークには 7 つの主な区画があり、いずれも長方形を成している。ボウリング・グリーンらしきものが一つ、ノットやトピアリーを盛り込んだ装飾の花壇が三つ、そして、それ以外は果樹と野菜の栽培に当てられていたものと思われる。

ムアパークが十七世紀後半の英国で支配的であった整形形式庭園を基調としていたことは絵からも明らかである。しかしながら、テンプルは理想の庭園と評したハートフォードシャーのムアパークを自らの庭園作りにおいて模倣したわけではない。たとえば、先の『エピクロススの庭』からの引用にみたような、庭の各部分の間の段差、屋根付きの回廊、人工の洞窟などの特徴は、テンプルのムアパークにはみられない。ところで、七つの主な区画の外側には、曲がりくねった小川もしくは運河を配した部分がみられるが、これは『エピクロススの庭』でテンプルが示唆している中国風の不規則な美の可能性を、小規模ながら自ら試したものではないかと思われる。十八世紀後半に「サーペンタイン」(serpentine) としてランスロット・「ケイパビリティ」・ブラウン (Lancelot "Capability" Browne) らによって一世を風靡した、蛇のように曲がりくねった線の美的価値を認め、そして実践した最も早い例のひとつをテンプルのムアパークに見出すことができるかも知れない。テンプルは、不規則な美を庭園設計において試みるのは、凡才には危険が多すぎるので推奨できない、とエッセーの中でいっている。

この主張どおり、ムアパークの造園にあたって、テンブルは整形形式という「安全な」道を選んだのに違いない。

スイス人ミュラルトの観察

テンブルが住んでいた頃のムアパークについて書かれた、おそらく唯一の詳しい記述は、スイス人ミュラルト (Béat de Muralt) によるものである。ミュラルトは1694年にテンブルの屋敷を訪ねた際の印象を、『英国書簡』(1725年；英訳1726年)に次のように記している。

たまたまこの名高い外交官・哲学者の近隣に行った。そのとき思い出したのは、数日前読んだ彼の著作の一つだった。そこで彼はこうしている。英国を訪ねた外国人は大したこともない宿屋と人々でもってこの国に悪い印象をもっているが、おそらく、ジェントルマンと知り合いになるほどの生れも財産も資質もなかったのであろう。[中略] 私は彼の邸宅に行き、ひどく丁重に歓迎された。かといって、この国のどこでも同じようだろうとは思わなかった。英国でも他の国でも、サー・ウィリアム・テンブルのような人は滅多にいない。いろいろな国の長所を知っている彼のような人は、自分の国について教えるところが殆どない。[中略] 隠居するのに理想的な場所を見たのは彼の屋敷においてであった。客が訪ねるには十分に街から遠いし、空気はいいし、土壌もよい。眺めはさほどよくはないが美しいし、せせらぎ以外に聞こえる音もない。屋敷は小さいが使い勝手がよく、家具も似合っている。屋敷に見合った庭園は主人自ら世話をしている。彼は仕事をしていないが、そうする野心もないように見える。仕える者は少ないが、気の利いた者がいるだけでも大変な幸運といわざるをえない。こうして、テンブル氏は健全で快活である。確かに痛風気味で歳もとってはいるが、一緒に歩かされて疲れた。もし雨が降らなかったならば私は降参していただろう。この愛すべき老人は、わざわざ来てこんな小さな屋敷を見ただけでは勿体ない、[中略] ロンドンに帰る前にサマセット公の田舎屋敷ベットワースに行きなさいといった。彼はそこに行くのに馬と従者たちを用意してくれたうえ、万が一公爵がロンドンに行っていないかも知れないからといって、妻に公爵夫人への手紙を書かせた。[中略] この〔ベットワースの〕壮麗な邸宅にいと、テンブル氏の閑静な屋敷と小さな庭園が常に思い出され、静謐で人里離れた生活の楽しさに憧れた⁽¹¹⁾。

ジョナサン・スウィフト

スウィフトはダブリン大学トリニティ・カレッジを卒業（文学修士）してまもなく、名誉革命で混乱したダブリンを離れ、母の紹介で書生としてテンブルの屋敷に入った。これは1689年の半ば頃のことである⁽¹²⁾。その後ほぼ10年に亘って、年齢でいえば22歳から32歳までの間、スウィフトはムアパークに住むことになる。この間にスウィフトは2度アイルランドに戻っている。1度目は1690年、健康上の理由からで、2度目は1695年アイルランド教会の聖職者となり任地キルルートへ赴くためであった。

ムアパークにおけるスウィフトの地位は、一介の書生からテンブルの秘書へと向上していったといえる。テンブルとスウィフトの主従関係が実際どのようなものであったのかという点は興味深い問題だが、ここでは立ち入らないことにする。ふたりの仲が必ずしも常に円満でなかったとすれば、それは一方では年老いたうえに不幸続きだったテンブルのふさぎこみがちな気分のせいであり、他方ではスウィフトのパトロンに対する分不相応な栄達への期待のためであったと思われる。しかし、後に高名な文人となるスウィフトにとって、ムアパーク時代は実り多い修行期間だったことも確かであり、著名な元外交官の文人テンブルから政治観や文体について学んだところが少なくなかったのではないかと筆者は考える。少なくともキルルートから戻って以後のスウィフトが、それ以前よりもテンブルの信頼を得るようになったらうことは推測できる。その手がかりのひとつはテンブルの遺言である。1695年3月に書いた遺言の中にスウィフトの名は言及されていないが、弟ヘンリーの死に伴って1698年2月に加えた条項には、スウィフトに100ポンド遺贈すると書いてある⁽¹³⁾。また、1699年1月のテンブルの死後、スウィフトは遺稿の編集出版を行ったが、スウィフト自身によれば、それはテンブルから委託された仕事であった⁽¹⁴⁾。

テンブルとの関係はさておくとして、後年のスウィフトはムアパーク時代を時折懐かしく思い出している。ムアパークは何よりも先ず生涯の友人エスター・ジョンソン（ステラ）と出会った場所である。ステラはテンブル家に仕えていた使用人の子で、スウィフトより13歳年下であったが、読み書きを教える教育係として初めは接した。大学時代あまり勉学に身が入らなかったスウィフトだが、ムアパークにおいては大いに読書をし、後の創作の糧となった。ここではテンブルの豊富な蔵書を利用することができたし、また、都会の喧騒とは程遠い静寂があった。テンブル家の家人以外に人と会わないことが2、3ヶ月続くこともしばしばあると、当時スウィフトは叔父に宛て

た手紙の中で述べている⁽¹⁵⁾。読書の合間には近くにあるクルックズベリの丘 (Crooksbury Hill) を駆け足で上り下りした。

スウィフトが寝泊りしていたのは、テンプルの屋敷からやや離れたところにある小屋だったといわれる。今も残るこの萱葺きの小屋は、かつては“Dean Swift’s House”と呼ばれたが、ステラが住んでいたという説もあり、現在は“Stella’s Cottage”として知られる。真偽の程は定かではない⁽¹⁶⁾。“Stella’s Cottage”のさらに東側には自然の洞窟があるが、スウィフトはこれを題材にした詩“Mother Ludwell’s Cave”を書いた⁽¹⁷⁾。

スウィフトはテンプル亡き後、テンプル家の人々とはあまり良好な関係になかったが、唯一友好的な関係を保ったのがテンプルの甥（弟ジョンの次男）ジョン・テンプルだった。ジョンはテンプルの孫エリザベスとの結婚によりムアパークを相続した。1706年ジョン・テンプルに宛てた手紙の中でスウィフトは、「ムアパークへの招待ありがとうございます。彼の地はこれまで忘れたこともありませんし、こよなく愛しております」と述べている⁽¹⁸⁾。それから30年後、スウィフトは同じジョン・テンプルへの手紙で、ムアパークのその後についてはよく知らないが、庭と屋敷がずいぶんと改善されたことは聞き及んでいる、と記している⁽¹⁹⁾。

十八世紀初頭の英国庭園史は、スウィフトのふたりの友人ポーブとアディソンの見解によってその文学的・美学的側面が知られている。スウィフト自身は自らの庭園観のようなものを書き残したわけでもないの、この方面への関心はさほど高くはなかったといわざるを得ない。しかし、庭園趣味を厳密に美学上の問題としてではなく、生活に密着した実践的な行為としてとらえるならば、スウィフトにもそれなりの庭園作りへの興味はあったのである。この点についてはあまり知られていない。まず、彼の聖職禄保有地であったミーズ (Meath) 州ララカー (Laracor) では、彼が赴任したときには荒れ果てていた教会の建物と敷地および周囲の整備に力を注いだ。その一環として、前を流れる小川を利用して小さな運河を作り、川のほとりには柳の木を植え、また、桜・柘・リンゴの木を植えて庭の景観を整えた⁽²⁰⁾。1713年ダブリン聖パトリック大聖堂の主任司祭となって以降のスウィフトは、気に入っていたララカーにあまり行けなくなったこともあり、また、教会付きの狭い庭では物足りなかったこともあり、近くに広い区画を借りて、「ナボトの果樹園」(Naboth’s Vinyard) と彼らしい名前を付けて馬の飼育と果樹の栽培を行った。600ポンドも費やしてこの区画にめぐらした塀は彼の自慢であったが、この塀によって馬が安全に保管されたのみならず、梨などの wall fruits の栽培が可能になった。「ナボトの果樹園」の隣にはこれより小さ

い「シバの庭」(Sheba's Garden)があった⁽²¹⁾。これらの庭はトウィクナムのポープの庭園のような優美さはないが、広さだけは負けないと、スウィフトは庭園好きの詩人を招く手紙の中で書いている⁽²²⁾。スウィフトは時代の流行であった庭園作りに無関心ではなかったわけだが、彼の関心が Templars のムアパークでの体験を反映していないとは考えにくいであろう。

ムアパークの変遷

以下では Templars のムアパークが、彼の死後から現在に至るまでどのような変遷を辿ったかをみることにする。これはカントリー・ハウスとその庭園という英国の景観を形作るひとつの典型的要素についてのケーススタディのつもりである。いささか多くの紙面を費やすことになると思えば、それはひとりサー・ウィリアム・テンブルという人物研究の域を超えて、彼が体現した英国のジェントルマン階層の趣味が300年という時を超えていかに継承されてきたかを示したいからである。

1723年、パーシヴァル卿ジョン・パーシヴァルがテンブルの甥ジョン・テンブル(前述のスウィフトの書簡の受取人)をムアパークに訪ねた際、こう記している。

……ここを買ったのはかの偉大なるサー・ウィリアム・テンブルで、彼はいたく気に入って庭の一部を作った。が、甥が多くをそれに加えて、まことに心地よい地所にした。彼はウェイ川から引いた水を利用して、庭の真中に見事なふたつのカスケードをしつらえた。切り込み庭には四つの古代風彫像がある。若いプリアプスとその連れ、パッコスとディアナである⁽²³⁾。

翌1724年に出版された『ブリテン島周遊』(*A Tour through the Whole Island of Britain*) (1724年)の中でダニエル・デフォウは、シーンのテンブルの庭について「えもいわれぬほど見事」と記しているが、当時の所有者について、テンブルの弟の息子ではなくて、テンブル本人の息子と誤った記述をしている⁽²⁴⁾。

1738年の『ロンドン・マガジン』に「故サー・ウィリアム・テンブルの地所、サリー州のムアパーク」と題する作者不詳の詩がある。この詩自体に特に価値があるとは思われないが、テンブルと彼の庭園を顕彰したこのような詩が存在することは注目し値しよう。英国に詩神が存在する限り、これ以上甘美な詠うべき主題はないとして始まるこの詩は、おそらくムアパークを実際訪ねてその庭園の見事さに心を打たれた、詩心のある人物が書いたものであろう⁽²⁵⁾。

ムアパークとは目と鼻の先にあるファーナムに生まれ育った保守党国会議員ウィリアム・コベット (William Cobbet) は、1825年の『田園逍遙』(*Rural Rides*)において、ムアパークを訪ねたときのことを、次のように記している。

かつてはサー・ウィリアム・テンブルの屋敷だったが、私が幼い頃は、テンブル家のある夫人のものだった。リチャードを「ラドラム夫人の洞穴」に案内したが、嘆かわしいことに、私が知っていたような魅力的な場所ではなくなってしまっていた。[中略]半円形のバケツはなくなっているし、決して絶えることのないせせらぎを受けとめる受け皿もなくなっている。訪れた人たちが水を飲む、鎖で繋いでいた鉄製のカップもなくなっている。舗装はずたずたになっている。洞窟の両側にあった腰を下ろす椅子は壊れてなくなっている。こぎれいに手入れされた水路は今や汚いどぶになっている。そして、向こう側の土地は、整然と刈り込まれた芝の小道が横切る月桂樹の茂みだったが、今や見苦しいハンノキの雑木林になっている⁽²⁶⁾。

コベットの時代には、ムアパークのロマンティックな雰囲気は既にいささか失われていたようであるが、進化論者チャールズ・ダーウィンにとっては、この田舎屋敷はまだ十分に魅力ある場所であった。ダーウィンは1858年、療養のためにムアパークにあるレイン (Lane) 医師の「心地よい」水治療施設に滞在した。この頃妻に宛てた手紙では、ムアパーク近隣のどかな自然の中でついうたた寝をし、鳥のさえずりや木を駆け登るリスやキツツキの声で目が覚め、それまでみたこともない田園の心地よさを味わったために、鳥や獣がどのように創られているのかといったようなこと、すなわち、自身の新しい学説である進化論などはどうでもよくなったと記している⁽²⁷⁾。

同じ年『図解ロンドン・ニュース』(*The Illustrated London News*)にはムアパークに関するかなり詳細な記事が掲載されている。これによると、敷地の面積は460エーカー(約184ヘクタール)で、そのうち60エーカーが庭の部分であった。テンブルの死後、ムアパークは孫のエリザベスが相続したが、子供がいなかったので甥(妹の息子)バジル・ベイコン (Basil Bacon) に地所を引き継がせた。彼は屋敷の南面を改修したが、その後半世紀ほど地所は荒廃し、十八世紀末に地所を借りていたロンドンの商人テニスン氏⁽²⁸⁾が修復したという。そして記事が書かれた当時の所有者はベイコンの相続人 (Charles Williams) の家系であり、テンブルの時代を彷彿とさせるかのように、時の国王ヴィクトリアがこの地を訪れたばかりだと記している⁽²⁹⁾。

その後のムアパークの歴史については Victoria County History シリーズのサリ

一州の巻が役に立つ。ちょうど前記『図解ロンドン・ニュース』の記事が書かれた年、ムアパークはベイコン家からベイトマン (La Trobe Bateman) 氏に売却された。このとき屋敷内にあった30枚ほどの絵画が、テンブルの子孫で時の英国首相パーマストン卿 (Henry John Temple) によって買い取られたという。十九世紀末以後、ムアパークはその所有者を頻繁に変えることになる⁽³⁰⁾。

1921年の競売カタログによると、ムアパークの屋敷は広間、ビリヤード室、4つの客間、19の寝室、それに3つの浴室から成っていた。地所は264エーカー(約107ヘクタール)とある⁽³¹⁾。第二次大戦中、屋敷はカナダ軍の施設として使われたりして荒廃し、解体されかけたこともあったが、篤志家たちの保護運動によって存続されたのみならず、戦後には大規模な修復がなされた⁽³²⁾。近年には英国国教会の生涯教育施設「ムアパーク・カレッジ」となったりしたが、1984年以後ムアパークは、生け花教室 (Constance Spry Flower School) と花嫁学校及び夏期の語学研修施設 (Campana International College) として民間の手で運営されている。

テンブルの死後ムアパークのロマンティックな雰囲気留着めていたもののひとつは、彼の遺言にしたがって屋敷の東に面した花壇の日時計の下に埋められた彼の心臓である。本人の遺志かどうかはともかく、遺体とは別に心臓を埋葬するということが、西洋ではときどき行なわれる。少なくともその慣行は中世に遡るようだが、近代ではショパンやハーディがその例である。このような埋葬の習慣がいかなる宗教的あるいは思想的伝統に基づくのかは興味深い点であるが、その歴史的背景について筆者は不明である。テンブルの伝記作家の誰もこの点に関心を示していないのは残念である。

現在のムアパークの所有者によれば、例の日時計は近年一度盗難にあったがまた戻ってきたようである。しかし、それはテンブルの時代の日時計とは別物であるらしい。また、数年前敷地の一角から偶然に地下の喫煙室 (smoking room) がいくつかの物品と共に発見されたが、テンブルの時代の物はパイプだけらしい⁽³³⁾。

注

この論考は一橋大学『人文科学研究』第36号(1999年1月)掲載の拙論「サー・ウィリアム・テンブル」の一部を大幅に加筆修正したものである。

1. Homer E. Woodbridge, *Sir William Temple: The Man and His Works* (N.Y.: MLA, 1940), p. 50.
2. *The Works of Sir William Temple, Bart.* 2nd ed. 2 vols. (1731), I, pp. 185-86.
3. *Ibid.*, p. 186; Geoffrey Jellicoe and Susan Jellicoe, eds., *The Oxford Companion to*

Gardens (Oxford: Oxford Univ. Press, 1986) の Susanne Lang による “Sharawadgi” の項参照。

4. Tom Turner, *English Garden Design: History and Style since 1650* (Woodbridge, Suffolk: Antique Collector's Club, 1986), pp. 17-18; Nicolaus Pevsner, *Englishness of English Art* (London: 1968), p. 165; David C. Stuart, *Georgian Gardens* (London: R. Hale, 1979), pp. 24, 55. ホレス・ウォルポールは『エピクロス庭』における「完全な庭」の描写の味気なさを指摘しているものの、中国式庭園のくだりには注目している。Michael Charlesworth, ed., *The English Garden: Literary Sources and Documents*, 3 vols. (Mountfield, E. Sussex: Helm, 1993), II, pp. 399-400 (Horace Walpole, *Anecdotes of Painting in England* [1780] からの引用) 参照。
5. Woodbridge, pp. 59, 114.
6. *Ibid.*, p. 214.
7. J. E. B. Gover, A. Mawer and F. M. Stenton, *The Place-Names of Surrey* (Cambridge Univ. Press, 1934), “Moor Park”.
8. E. S. De Beer, ed., *The Diary of John Evelyn*, 6 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1955), IV, pp. 142-43.
9. *Ibid.*, p. 576. 園芸家としてのテンブル、特に彼の果樹栽培に関しては Ruth Isabel Ross, “Statesman into Gardener: Sir William Temple (1628-99), *Country Life*, 155 (January 17, 1974), 76-77 を参照。
10. 現在の Moor Park House にこの絵が飾ってあるが出自については不明である。複製は Turner, *English Garden Design*, p. 66 および Colin Platt, *The Great Rebuildings of Tudor and Stuart England: Revolutions in architectural taste* (London: UCL Press, 1994), p. 58 に見ることができる。
11. この一節は Woodbridge, pp. 232-33 および Thomas Peregrine Courtenay, *Memoirs of the Life, Works, and Correspondence of Sir William Temple, Bart.*, 2 vols. (1836), II, pp. 488-91 に引用されている。
12. Irvine Ehrenpreis, *Swift: The Man, His Works, and the Age*, 3 vols. (London: Methuen, 1962-83), I, p. 102.
13. Courtenay, II, pp. 484-86.
14. Harold Williams, et al, eds., *The Prose Writings of Jonathan Swift*, 16 vols. (Oxford: Basil Blackwell, 1939-74), I, pp. 256, 259; V, p. 194; Harold Williams, ed., *The Correspondence of Jonathan Swift*, 6 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1963-65), I, pp. 155-57; III, p. 125.
15. *Corr.*, I, p. 12.
16. William Page, *A History of Surrey*, 4 vols. (1912), II, p. 593.
17. Pat Rogers, ed., *Jonathan Swift: The Complete Poems* (Harmondsworth: Penguin, 1983), pp. 74-75.
18. *Corr.*, I, p. 54.
19. *Corr.*, V, p. 6.

20. Ehrenpreis, II, p. 94 ; III, pp. 32, 72 ; Louis Landa, *Swift and the Church of Ireland* (Oxford : Clarendon Press, 1954), p. 37 ; Joseph McMinn, *Jonathan's Travels : Swift and Ireland* (Belfast : Appletree Press, 1994), p. 41.
21. Edward Malins and the Knight of Glin, "Landscape Gardening by Jonathan Swift and His Friends in Ireland," *Garden History*, 2 (1973), 69-93. これはアイルランドにおけるスウィフトの庭園作りに関するおそらく唯一の研究である。
22. *Corr.*, IV, p. 170 ; Ehrenpreis, III, p. 331.
23. Christopher Hussey, "Templum restauratum : Sir William Temple's House and Garden at Moor Park, Farnham, Reconstructed," *Country Life*, 106 (November 25, 1949), 1581 に引用されている。
24. Daniel Defoe, *A Tour through the Whole Island of Great Britain*, 2nd rev. ed. (London : Dent, 1974), I, p. 164.
25. Anon., "On Moor Park in Surrey, the Seat of the late excellent Sir William Temple," *The London Magazine : And Monthly Chronologer*, 7 (September, 1738), 463.
26. William Cobbett, *Rural Rides*, ed. George Woodcock (Harmondsworth : Penguin, 1967), p. 250.
27. Sir Francis Darwin, *Autobiography of Charles Darwin*, 3 vols. (London : Watts, 1949), I, pp. 85-86 ; II, p. 114.
28. Page, *Surrey*, II, p. 593 には "Timson" とある。
29. *The Illustrated London News*, (October 2, 1858), 302. 屋敷の銅版画の挿絵がある。
30. Page, *Surrey*, II, p. 593.
31. *Moor Park, Farnham. For Sale by Auction. On Tuesday, 11th October, 1921. At the London Auction Mart.* (ケンブリッジ大学図書館地図室所蔵)。
32. Hussey, "Templum restauratum," 1578 ; Nigel Temple, *Farnham Buildings and People*, 2nd ed. (London : Phillimore, 1973), p. 230.
33. Mrs. Martine Frost の私信による。